

乳腺外科医裁判 控訴審で逆転有罪 長野協会も外科医の支援を決定

2016 年東京都足立区の柳原病院で自身が執刀した女性患者に対してわいせつな行為をしたとして、男性外科医が準強制わいせつ罪で逮捕・起訴された裁判について、県保険医協会では 10 月常任理事会にて、被告とされている外科医師を支援することを決定した。今号ではこれまでの事件の概要と裁判の経緯について紹介したい。

事件の概要

2016 年 5 月 10 日東京都足立区の柳原病院で、右胸から良性腫瘍を摘出する手術を執刀した S 外科医師が女性患者から、「術後に左胸を舐めたり、左胸を見ながら自慰行為をするなどのわいせつ行為を受けた」と訴えられた。女性患者は手術時に全身麻酔をし、被害を訴えたのは術後約 30 分のことだった。被害の連絡を受けた女性患者の上司が警察に通報し、同日中に警察官が女性患者の左胸から付着物を採取。鑑定の結果、外科医師と同型の DNA 型が検出され、アミラーゼ鑑定で陽性反応が認められた。S 医師は「準強制わいせつの疑い」で、事件の約 3 カ月後の 8 月 25 日に逮捕、起訴された。そして、12 月 7 日に保釈されるまで 105 日間にわたって身柄拘束を受けることになった。

裁判の争点は 2 点

裁判では「DNA 鑑定及びアミラーゼ鑑定の信用性」、「女性患者の被害証言の信用性」の 2 点が主な争点となっている。

弁護側証人の法医学者の証言では、術前に女性患者の乳頭を素手で触診した際や、手術室で他の医師等に手術の説明をした際に、会話で飛んだ唾液の飛沫が付着した。実際に実験を行い、触診や術前の相談を行った結果少なく

ない量の DNA 検出やアミラーゼ陽性があったことから、科学捜査だけでは犯罪の証明にはならないとした。また科学捜査研究所（科捜研）の鑑定の問題点を指摘。1. ガーゼで微物採取する過程が写真等で記録されていない。2. DNA 抽出液を破棄し事後検証が不可能。ガーゼは半分残っているとのことだが、付着物の DNA 量が同じではなく、管理方法も曖昧なため代わりにならない。3. 鑑定試料と同時に増幅した標準試料の増幅曲線や検量線がない、標準試料のデータがなければ鑑定試料の DNA 定量値に科学的根拠はないと言わざるを得ない。4. アミラーゼ鑑定の実施手順が示されず、陽性反応の証拠写真もなく、観察者の主観のみであること。5. ワークシートが鉛筆書きで 9 か所の書き換えが確認された。と科捜研の鑑定は科学的に検証できず信用性が担保できないと言及した。

第 2 に女性患者の証言の信用性について、女性患者は術後検温をしようとした看護師に「ふざけるな、ぶっ殺してやる」と言ったことも、被害に遭ったとする以前にナースコールを押して看護師が訪室したことも、同室患者が聞いたとされる「お母さんなんて嫌い」等を病棟全体に聞こえるような大声をだしたことも覚えていない。弁護側証人の麻酔学専門家は、「乳房手術も疼痛もせん妄の危険因子である。全身麻酔薬プロポフォールはせん妄の原因となり、本件では通常の倍量が使用されている。プロポフォール使用後の術後せん妄で性的な幻覚を見た例が海外で多数報告されている。一方で鎮痛剤ペンタゾジンは通常の半量で、本件では疼痛があった。幻覚の体験は非常に鮮明で現実味がある。意識障害状態があ

り注意障害も認められることから、女性患者はせん妄状態で幻覚をみていた可能性は相当ある」と証言した。

他にも、女性患者の病室は 4 人部屋の満室、女性患者のベッドは廊下の入り口からすぐの左側にありドアは常に開放されている。また、受け持ちの看護師が 14 時 45 分～15 時 30 分頃にかけて 7 ～ 8 回、定時の術後管理やナースコールで呼ばれてベッド脇へ行っていた等を考慮すると、とても人知れずわいせつな行為ができる状況では無いことが分かる。

東京高裁はせん妄を認めず

2019 年 2 月 20 日に行われた東京地裁の判決では S 医師側の主張が全面的に認められ無罪判決となった。東京地裁は女性患者は麻酔から覚醒する際にせん妄状態に陥っていた可能性は十分にあり、せん妄に伴って性的幻覚を体験していた可能性が相応にあることから、女性患者の証言の信用性に疑問を差しさむことができる。本件アミラーゼ鑑定と本件 DNA 定量検査も信用性に疑義があり、仮に信用性があると仮定してもその証明力は十分なものではなく女性患者の証言の信用性を補強できないとして無罪判決に至った。しかし検察はこれを控訴した。

2020 年 7 月 13 日東京高裁は無罪とした一審判決を破棄し、懲役 2 年の実刑判決を言い渡した。東京高裁は科学捜査の結果に関して、アミラーゼの陽性反応を示す資料はないが、科捜研の技官が相当の技術を有し適切に鑑定した以上、あえて虚偽の証言をする実益も必要性もないことから鑑定結果の

1 審・控訴審の経過

2016 年	5 月 10 日	事件
	8 月 25 日	逮捕・拘留
	9 月 14 日	起訴
	11 月 30 日	第 1 回公判
	12 月 7 日	保釈
2018 年	9 月 10 日	第 2 回公判
2019 年	2 月 20 日	無罪判決
	3 月 4 日	検察が控訴
2020 年	2 月 4 日	第 1 回公判
	2 月 26 日	第 2 回公判
	4 月 15 日	判決予定日（新型コロナの影響で延期）
	7 月 13 日	有罪判決

信用性は否定されない。DNA 定量検査について、科捜研の技官がワークシートを鉛筆で記載し、消しゴムでの修正や鉛筆での追記をした事は科捜研技官の誠実性に関わるかはともかく、直ちに検査結果の証明力を減じないとした。女性患者のせん妄については、わいせつな行為に関する証言は具体的で迫真性に富み、一貫性があり、SNS で上司に送ったとされるの「たすけあつ」「て」「いますぐきて」等のメッセージと符合している。また、スマートフォンを探し出した上、アプリを起動し宛先を選択しメッセージを入力できたことから、せん妄による意識障害があったことは相いれないとした。

有罪判決を受け弁護団は即日上告、舞台は最高裁へと移った。保団連からは科学的な証拠が不十分であっても有罪という判決は「疑わしきは被告人の利益に」という刑事訴訟法の原則の否定であり、あまりにも不当で許し難いと抗議。本裁判に関しては日本医師会も含め支援を表明している。

11 月 15 日、県保険医協会も加盟する地域医療と公立・公的病院を守る長野県連絡会（以下連絡会）は県民シンポジウムを長野市のバスターミナル会館にて開催、協会からは宮沢会長と林副会長が参加した。公立・公的病院の再編統合問題を共有するために企画したもので約 70 名規模で開催した。開会に先立ち県保険医協会の宮沢会長は、「本日のシンポジウムが各地域での医療提供体制を考える契機になることを期待する」と主催団体を代表してあいさつした。社保協の原事務局長から 12 病院との懇談と県や厚生労働省への要請など連絡会の活動経過を報告したのちに、第一部として三重短期大学の長友教授



シンポジストとして参加した院長等

より「地域医療と公立・公的病院をめぐる政策動向から」と題して、基調講演が行われた。

第二部では、松本協立病院の佐野院長がコーディネータを務め、シンポジストとして、飯山日赤の石坂院長、川西日赤の大和院長、佐久穂町立千曲病院の植竹院長と、飯田下伊那地区から高森町の元役場職員の清水氏がそれぞれ発言した。

各病院長からは、今回の病院名公表に対する憤りと新型コロナ対策を含めた地域で担っている病院の役割が報告されるとともに、当面病床は維持していく強い決意が表明された。

地域医療を守る長野県連絡会 県民シンポジウムを開催